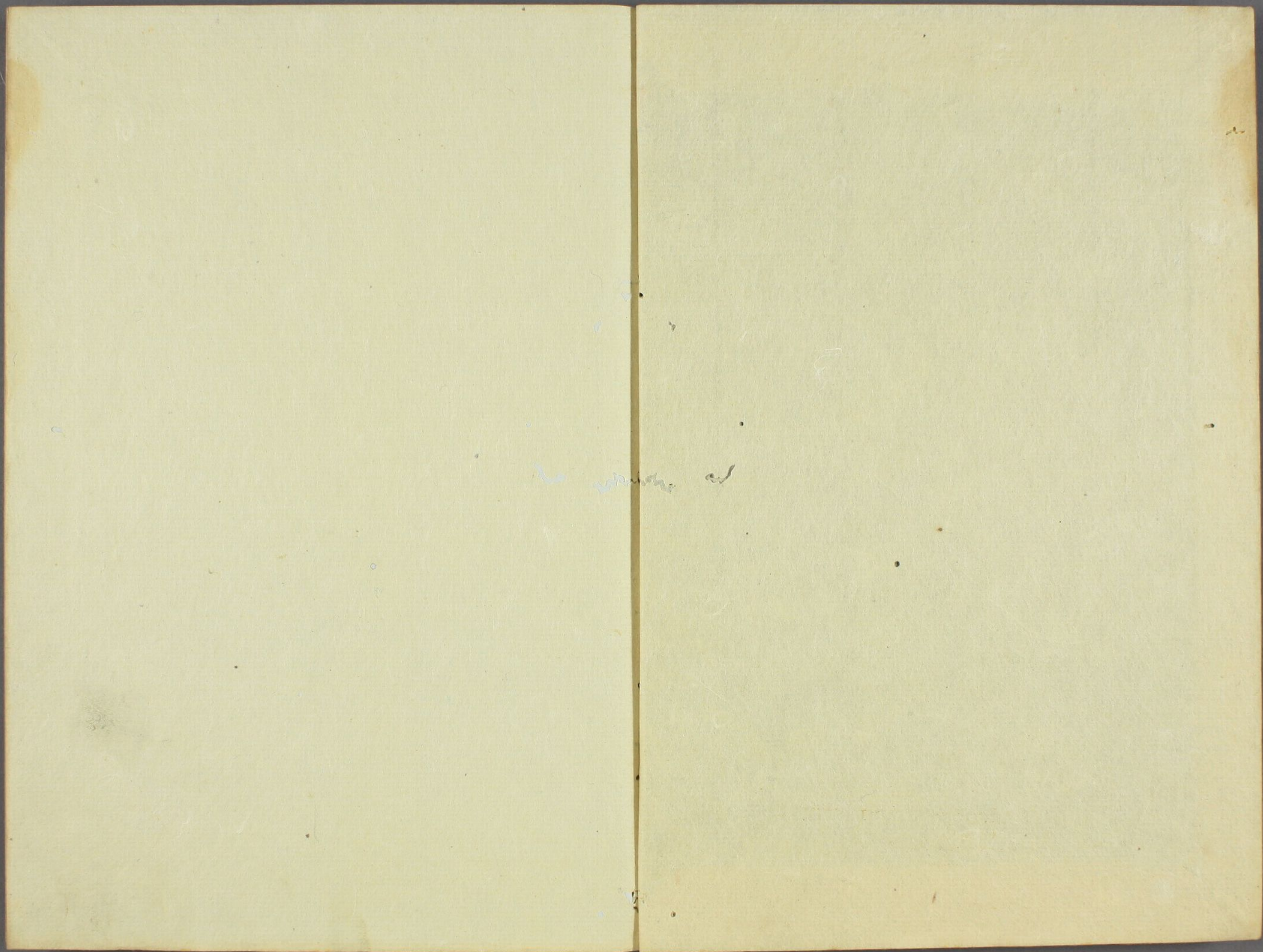


沈
乃
藻
眉

二





○沁乃藤原公家三

○光明院

九十七代の帝を巧きもやうもせし是仁と
中なるはるも神母を唐の物に隠しおかし
建武三年陰年十二の世の中さうし
比古位を即ちしは時神靈を其の
せりくと志ありは位まつをまはる後多
佛例もや信ん又由の常として伴給候を
られ天照大神よりまはるしを
ありそそれともこれめを
て道とすはかといしと神の成候も



妻を花秋にまもらるるにこそ山あひし
すゆのこをしき二月に山あひの軍を
さす女共の城を考ふるれども我々の
助をさすにひく山あひの城に入
義親を自害しす先ぬ親を中
東京よりかきも京よりかきも
はうひも後平を海よりかき
近衛の大長をけふとて関白
某所よりかきも後平の基
うはりもかきも後平の基
ぬつと一條の大長を
花子

大納言を右大長に
き何事の大納言
侍になん冬
を親を果し
らんと芝
是は後ひ
入道の子
まけり
念ふを
多き軍
中う今年

○ 沁乃源房出等四

○ 崇光院



九十八代乃成嗣を新院の一北皇子とて改諱無仁
 とす。後母を陽縁の院とて公孫の太長の子と
 名和四年十月カニヤツキ、先帝の嫡孫とて安らぎを授けり
 以後、即せり。元年十五とてやむるに、延運の上皇
 乃之を皇春女とて居させたり。は、延運の心せり。な
 り。ふかしくさるるなり。いとあまらき。後子也
 存す。司のおとめ。けり。後を二修の太長と
 名ふ。甲申、公孫の太長とて、大政太長を改めり。
 やうて、佛ゴケイ襖イ大カイト帯ムカ今ニあるとあり。とて、
 名をけり。

百連つて滞占シはくをせなつゝおもき滞つゝしよのじ
奏し侍る右兵衛佐を去年より獲籠りて
小右衛門の申出あるまの聲よあこしりしに
きつゝおのれが餓クをききしに
あつゝおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ
佐カスラ方人あつゝ三浦入道と名見の足き軍を
起しおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ
りし師泰東をおくそえりしをひきつゝ文月
初をひきつゝあつゝおのれをひきつゝあつゝ
起しおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ
らつゝおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ

百連つて滞占シはくをせなつゝおもき滞つゝしよのじ
奏し侍る右兵衛佐を去年より獲籠りて
小右衛門の申出あるまの聲よあこしりしに
きつゝおのれが餓クをききしに
あつゝおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ
佐カスラ方人あつゝ三浦入道と名見の足き軍を
起しおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ
りし師泰東をおくそえりしをひきつゝ文月
初をひきつゝあつゝおのれをひきつゝあつゝ
起しおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ
らつゝおのれをひきつゝあつゝおのれをひきつゝ

王の法も子ありて孫ありて

之吉野をうらまひしに西に下りて信濃の地を
程ありて程して信濃はより古くあり

今見てもおもほゆる所から好むし老の徳彰や
花もさうめん武家の人となし此郡よりとむ
昔のちりて帰るはつて者さうしてあはれなきは
今も都人の心おちあはるる内より入道の跡の
小治の跡を勤王の大納言を後使すと仰るまはる
よらこむをまゝとせりて又月子を義隆のおの方
子うそむむとていふおのこもてとあるは武家
の人よりこむあひとて院よりもは使し

清和を帰らせき又げらり世中の難からぬと
るといふもさうとおほひて子孫の入道は都
をともあはれしおのまゝ軍を廢せしむといひ
おとら又いうは乱きり世中やとゆはるは長を
昔河原の宮方をりて急ぎおをわく教は
向ひて川をさうして鎌倉はあつてあきハ又さ
るさむふ難を揚る路河のまゝ殿をおはす
こゝむを都の軍より入道は後ひやんとあ
あうちの徳をさうして伴ひて鎌倉に入ると
程なくんは煩むとあめとやとて満ちを毒
を看せしむる人戸はる一之弘の昔さ

時、
乃、
よ、
を、
限、
あ、
天、
あ、
一、
了、
吉、

お、
夢、
と、
P、
子、
あ、
名、
も、
や、
と、
中、

さいしーいむ春の世よりある内の大信

こと海よりあつた板入あつた色を
あひ切つていへん 國事かあつたひらつた
はらふ半島の舟のこゝをばくをまき
をあらんしよ上のあま

傳後まゝの十島はしりしあれは信治
附をえくしつは神製をうけぬとつて
す川まき

君、代々のあつたあまや信治まゝ
信の書物まゝ二月を関の、其月の半
まゝに書物あつたまゝの半、天玉

乃信ははんゆひなまは信向して人
なまびつとつたまゝのあつた打解
まゝつれと信のまゝの信の信の信
まゝのまゝの信の信の信の信の信
東子入りの信の信の信の信の信
桂川を信の信の信の信の信の信
まゝの信の信の信の信の信の信
打出あまの信の信の信の信の信
まゝの信の信の信の信の信の信
信の信の信の信の信の信の信
つらまの信の信の信の信の信の信

